

ISO15189 取得を見据えた病院機能評価への取り組み

◎田中 浩一¹⁾、永田 篤志¹⁾、高嶋 幹代¹⁾、中根 生弥¹⁾
JA 愛知厚生連 豊田厚生病院¹⁾

【はじめに】

病院機能評価は、病院を対象に組織全体の運営管理および提供される医療について公益社団法人 日本医療機能評価機構が中立的、科学的・専門的な見地から評価を行うツールである。この機構の求める要求事項を満たすことは、患者への安全で安心な医療の提供に繋がる。今回、我々は2019年1月に病院機能評価に臨み、検査科として良好な評価（S評価）を得ることができたので、その取り組みについて報告する。

【委員会の立ち上げと活動】

2018年5月に第1回病院機能評価準備委員会を立ち上げ、1回/月の割合で2019年1月までに計9回の委員会を開催した。委員会の構成メンバーは20代から30代の男女中堅技師を含む9名から成り、次回5年後の病院機能評価を見据えた構成とした。委員会の活動内容の主体は各種マニュアルの改訂であったが、並行して『病院機能評価 解説集』から、機構の求める要求事項の洗い出しを行い、対応策を構築した。また、『関連する項目』についても精査し、各部門で対応を行った。

【臨床検査機能に対する対応】

この項の『異常値やパニック値の取り扱い』では、検査された結果が確実に担当医に伝えられ、さらに患者に報告されたことの確認が取れる仕組み作りが求められていた。これに対し我々はパニック値が発生した場合の対応として、パニック値報告を医師へ行った後、カルテ記事から患者への対応を追跡・確認し、報告書に対応内容を記載する運用に変更した。また、生理部門では術中神経モニタリング（整形外科・脳神経外科）へ技師が出向し、

術者に大きな安心感を与えている。

【病理診断機能に対する対応】

この項では『診断結果の迅速な報告』が求められている。当院病理検査では病理組織検査のTAT短縮は概ね達成されており、今回、術中迅速診断におけるTAT短縮に臨んだ。検体提出から結果報告までを目標10分とし、複数検体が提出されて場合は対応技師を2名とし、業務分担（薄切と染色）することで効率的に標本作製を行いTAT短縮に努めた。

【輸血・血液管理機能に対する対応】

当院の輸血検査は既にI&Aを取得しているため、病院機能評価で求められる要求事項の多くは満たされていた。輸血後感染症に対する追跡調査においても、実施率は80%程度と良好であり、血液製剤の適正使用に向けた組織的な取り組みにより、廃棄率も0.1%以下で維持されている。

【まとめ】

今回の機能評価において、検査に関連する3項目全て（検査・病理・輸血）において『S評価』を受けた。要求事項に対する対応が評価された一方で、術中迅速病理の検体を技師がOPE室まで取りに行く、あるいは血液製剤・分画製剤は全て技師が病棟まで運搬しているなど、検査技師の積極的な他部門への介入が極めて高くの評価された結果であった。相手の求める要求事項の意図を考え、それに対応する能力が、いま求められている。当検査科は現在、ISO15189の取得に向け準備を進めている。病院機能評価での経験を活かし、臨床検査機能の更なる飛躍に繋がりたいと考えている。